

○黒川衣代 小西史子*

（大阪市大・院、 *佐賀大）

目的 第2報では食事のとり方と家族機能の関係を明らかにすることを目的とした。

方法 対象者、研究方法は第1報で報告した通りである。食事のとり方についての調査項目は第1報と同じであるが、さらに、夕食については誰と一緒に食べるのが一番多いかについても調べた。家族機能は、家族のまとまりを表す家族凝集性と自分の家族に対する満足の程度を表す家族満足度を調べた。家族凝集性はFACESⅢを用いて、家族満足度はFamily Adaptation Scaleにより測定し、点数化して指標とした。分析は、朝食、夕食それぞれについて、食事のとり方の各項目と家族凝集性、食事のとり方の各項目と家族満足度の相関を調べた。また、夕食については誰と一緒に食べるのが多いかによりグループ分けし、グループ間で家族凝集性、家族満足度に差があるか調べた。

結果 朝食について、食事のとり方の各項目と家族凝集性、食事のとり方の各項目と家族満足度の関係は、食事のときのテレビの視聴頻度以外の4項目全てにおいて有意差のある相関が認められた。特に、会話の頻度が家族凝集性、家族満足度の両方と最も強い相関を示した。夕食についての分析からも、全く同様の結果が得られた。また、夕食について、誰と一緒に食べるのが多いかにより分けられたグループ間の家族凝集性、家族満足度の差は、家族そろって食べるのが多いグループと一人で食べるのが多いグループ間で著しい差が認められた。